

play here 事務局



統括：

岩佐健一郎（環境政策課長・写真右）

私は、民間企業で勤務後、小金井市役所のコミュニティ文化課、男女共同参画室、職員課を経て、現職の環境政策課で環境や緑、公園に係る仕事を担当させていただいています。

市では、市立公園において、あらゆる子どもや保護者同士が誰でも参加できる遊び場等を整備し、相互理解の促進を図ることによって共生社会の実現を目指しており、様々な方々に支えられながらプロジェクトを推進しているところです。このプロジェクトでは、インクルーシブデザインに配慮した遊び場等を整備することがゴールではなく、整備することによって、利用者同士の交流が生まれ、お互いを思いやる気持ちが育まれ、公園を誰もが気持ち良く安心して過ごせる場所にしたいと考えています。

令和5年度から3か年のプロジェクトになりますが、その先、誰もが利用しやすい場所になっているのか、訪れたい場所になっているのか等の視点も重要であり、そのためにも、皆様の生の声をお聞かせいただき、今後の事業展開に活かしていきたいと考えています。ご理解・ご協力の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

プロジェクト担当：

小林勢（環境政策課緑と公園係・写真左）

私は、公園を管理する部署で働かせていただいて8年目となりますが、ちょうど配属されたときに、双子の子どもが生まれ、育児をしていく中で、近くの公園での人との関わりがあったから精神的に助けられた経験があります。

公園に行くと、子どもの笑顔を見ることができた、親も少しほっとできた、日頃の悩みが共有できた、そんな時間が市内の公園でも増えたらいいなという思いがきっかけで、このプロジェクトを立ち上げました。ただ、知的障害の妹もいますので、公園に行きたくても行けない方もいることも知っています。今まで公園に行けなかった方が、行ってみたい、この公園があってよかったと思ってもらえるようにしていくためには、公園に行けない背景や公園自体の様々な課題を、みなさんと一緒に考えて解決していくことが大切です。

このプロジェクトも今年で3年目を迎え、いよいよ公園整備が始まりますが、「整備して終わりにしない」ために、何をすべきであるのか、このプロジェクトで何をなしえるのかについて、事務局メンバーの中でも考えるとともに、みなさんとも会話を続けていきたいと思っています。

小金井市だからできること、みなさんとならできることが多くあると思います。小金井市に住んでいてよかったと思ってもらえるような公園をみなさんと一緒につくっていきたいと思います。



共同ディレクター：

熊井晃史（「とをが」主宰／「GAKU」事務局長／「東京学芸大子ども未来研究所」教育支援フェロー／「公民館のしあさって」編集など）

武蔵野市で生まれて、三鷹市で育って、小金井市に事務所とギャラリーのような場所を構えています。ずっと教育の仕事をしてきていますが、そこにあるのは学校とともに、学校の外の学びも豊かにしていきたいという思いでした。まさに、公園もその舞台の一つです。

一方で私は、難病を抱えている息子を持つ父親という立場もあります。ということもあり、このプロジェクトがより良くなっていくということを、あらゆる角度から願いつつ、令和6年度から参加し、**play here**というコンセプトを立案したり、当事者の方々、専門家の方々、関係者の方々にじっくりゆっくりお話をおうかがいし、とりまとめていくことに注力をしてきました。

令和7年度では、具体的な公園のハード整備が始まります。「ハード整備だけで終わらせない」と繰り返し感じていたことを、まさに試される年度になると考えています。



共同ディレクター：

飯石藍（公共R不動産シニアマネージャー兼編集長／株式会社nest取締役など）

こんにちは。飯石藍（いishiあい）と申します。私は、公共空間に関するメディア「公共R不動産」の編集者として公共空間活用に関する取材・情報発信・リサーチ、そして小金井市をはじめとした全国各地で、実際の公共空間活用プロジェクトの伴走を自治体・住民・企業などの方々と伴走しています。

また、私自身が暮らしている東京都豊島区では、南池袋公園・グリーン大通りを舞台に社会実験をハード整備や都市政策につなげ、公共性・寛容性あふれる場を生み出すべく「IKEBUKURO LIVING LOOP」というプロジェクトを行政・市民・地元企業と共創して進めています。

メディアと実践を巡りながら日々感じているのは、まちは行政だけがつくるものではなく、わたしたち一人一人の声と実践が織り重なって形作られるものだということです。公園に行きたくても行けない、生きづらさを抱える多くの人の拠り所として、さらに「こうなったらいいな」を描き実践・練習する場として、公園というフィールドが開かれていくための土台づくり、仕組みづくりを皆さんと一緒に進めていけたらと思っています。



土橋遊（ライター／コーディネーター）

こんにちは、土橋です。これまで、ワークショップ、こども食堂、不登校などをテーマに、ずっとこどもにまつわる仕事をしてきました。ひとりひとりが異なるユニークさを持つこどもと共にある暮らしは、遊びも学びも居場所も、もっと多様な選択肢があっていい。そんな選択肢が誰もにとっても開かれた社会であってほしい。そんな気持ちから、学校や行政、地域のみなさんと手を取り合える接点を探し続けながら働いています。

公園はみんなの希望が集まる場所なんだと、**playehere**を通して早速お会いできた方々とお話するたび、改めてそんなことを思います。より多くの方がいろいろなアイデアや夢を持ち続けられるプロジェクトでありたいし、一緒に形にしていける場を目指したい。これからもっとたくさんの皆さんとお話をするを楽しみにしています。



鎌田美実（公共R不動産プロジェクトマネージャー）

前原町に祖母の家があり、年に1度は訪れていた小金井。祖母が亡くなってからは訪れる機会も減っていたので、こうして関わることになるとは不思議な気持ちです。私は、中学生のとき不登校でした。家にも学校にも居場所がないように思えて、恥ずかしくて近所を出歩けなかった。当時、今よりも人の少なかったインターネットのなかだけが唯一「いてもいいと思える場所」でした。最近はインターネットも匿名性が薄れ、随分と窮屈になってしまい

ました。そんな今だからこそ、公園などの公共空間は、さまざまな人にとって「いてもいいと思える場所」になり得るのではと可能性を感じて、公共R不動産というチームで活動しています。

play hereは、小金井市の公園がそんな場所になっていく予感にあふれたプロジェクトだと思います。これまで活動してきた方や、これから関わってみたいと感じている方が、もっと活動しやすくなったり、小金井市の外までもその活動や切実な志が伝わっていくように。たくさん見て、聞いて、感じて、考えて、できることをやっていきたいと思っています。



松田東子(公共R不動産)

こんにちは。公共R不動産で、公共空間についての取材やリサーチを行っています。私事ですが、子どもが生まれて以来、取材などの際は、可能な範囲で子どもを連れて行っています。最初は保育園に入れずやむを得ずでしたが、公共空間やまちについて考える時に、当事者でもある子どもが存在するくらいはいいのでは、という思いから、自主的な社会実験のようなものとして続けています。結果としては、快く受け入れていただけることもあれば、難しいこともありました。前例がない、十分な設備がないと断られたり、不適切だと言われたこともあります。子連れでは行きたくても行けない空間がたくさんあることを知りました。一方で、会議場所を会議室からお座敷のある食堂に変更してくださったり、ちょっとパーテーションをずらして机でおむつ交換ができたり、客席ではなく照明用の部屋からなら講演会を聞けたりと、臨機応変に対応いただいて、子連れが叶うことも何度もありました。

公園は、子どもはもちろん誰もがウェルカムな場所であるはずです。そんな公園に、行きたくても行けないとき、どうしたらいいのか。設えで、工夫で、心遣いで、できることから変えていけるのではないかと。playhereでその模索のプロセスをご一緒できることをとてもうれしく思います。